



熊本地震の被災地支援者ら報告会



被災地支援で感じた課題を
話す報告者11日、県庁

車中泊避難、把握に難しさ
炊き出しで栄養に偏りも

熊本地震の被災地支援で浮かび上がった課題を共有するため、大分県は1日、現地で活動した団体などによる報告会を県庁で開いた。さばききれないほど大量の物資が避難所などに届く一方で、車中泊や在宅を選ぶ「見えない被災者」には行き渡りにくかったり、避難所での炊き出しで栄養に偏りがあつたりといった具体的な問題点を共有した。

県、問題点を共有

医療機関や民間団体、自治体職員などの計8人が報告した。オンラインを含めて県内の行政職員ら約300人が聞いた。

課題の一つに挙げたのは、被災者を把握することの難しさ。「人目が気になつて眠れない」などの理由で避難所に行かない人もいたという。

「避難イコール避難所」という考えでは見えない実態がある」と語つたのは、県社会福祉協議会の森美菜子さん(34)。熊本県八代市では市職員が駐車場を回り、1台ずつ車中泊の有無を確認していたが、夜しか戻つてこない被災者も多く「把握は難しい」と感じたという。

車中泊は姿勢が固定さ

りの難しさを明かした。メニューも満腹感のある牛丼などが目立つたが、「目指すべきは栄養バランスの良い幕の内弁当」と指摘。生野菜など加熱していない食材を出せない限界もあり、「災害関連死を防ぐには、公費で食事を賄うことも大事」と訴えた。

自治体の要請を待たず支援する「プッシュ型」が定着し、大量の物資が被災地に寄せられた。集積拠点の八代市総合体育館に山積みになっているのに、被災者の元に届きにくい「ラストワンマイル(最後の区間)問題」も取り上げられた。

沖縄県消防防災対策課の嶺井康太郎さん(37)は「当初は市職員が公用車で避難所に配送する作業を繰り返す、非効率だった」と指摘。地元の運送業者とつながり、円滑に運べる手段を確保する大切さを語った。

このほか、地震動の専門家や医師らが報告。大分県防災対策企画課の山口満課長(54)は「支援を受ける側になつたときのことを考えておかねばならない。できることから改善していきたい」と話した。

(羽山草平、中丸遼)



〔問①〕記事の内容を踏まえて、この記事における以下の言葉の意味について説明してください。

・見えない被災者

避難所に行かず車中泊や在宅避難を選ぶため、支援の手が届きにくい人々のこと。

・ラストワンマイル問題

被災地に届いた物資が、避難者へ配送する最終区間で滞ってしまう現象のこと。

・プッシュ型

被災地への支援の際に、自治体の要請を待たずに支援をすること。

〔問②〕記事の中では、全国からボランティア団体が駆け付けた八代市での食事の供給が「簡単にはいかなかった」とあります。難航した理由を記事を踏まえて書いてください。

ボランティア団体は100～300食分を用意しているケースが多く、用意している量よりも少ない人数の避難所へ割り振るわけにもいかないため、一定規模の避難所に食事の提供が集中してしまったから。

〔問③〕大分県防災対策企画課の山口課長は「支援を受ける側になったときのことを考えておかねばならない」と述べています。災害発生時に「見えない被災者」や「物資の行き渡りにくさ」、「炊き出しの偏り」などを解消するために、行政や市民、地元の民間事業者がどのような連携を行うべきか、あなたの考えを書いてください。

自治体が地元の運送業者と協定を結んで配送手段を確保するとともに、自治体と地域住民がSNSや専用エリアの設置を通じて在宅・車中泊被災者の情報をリアルタイムで共有・把握する体制を事前に構築しておくべきだを考える。また、保健師らの巡回ルートを確保するとともに、平時から地元の物流業者や農家と協定を結び、災害時に幕の内弁当など栄養バランスの取れた食料を機動的に配送する仕組みを作るべきだ。